

選外佳作の七

メダカの坊や

小原 すみ子

白い雲が、たんぼの小川にチラ／＼うつつて今日もい／＼お天気です。

チヨロ／＼小川の石のかげで、二三日前にメダカの坊やが三匹生れました。きつ／＼可愛い、赤ちやんだつたでせうね。

お天気がい／＼ので三匹の坊や達はお父さんとお母さんに連れられて、泳ぎのおけいこに石のかげから出て来ました。

「おや！随分明るいんだなあ」

「／＼つても廣いんだね」

「僕なんだか恐い様な気がする」

三匹の坊や達は生れてはじめて見るものばかりなので、本當にびつくりしてしまいました。

「あれ何？お父さん」

「され あ あれかい あれは麥だよ」

「ムギつて？」

「人間の食べるものなんだよ」

「ニンゲンつてなに？」

「おや／＼お前たちは生れて来たばかりで、何んにも知らないんだな。人間つてヒトの事だよ、さうだね、今にきつて／＼へやつて来るから待つておいで、教へてあげるからね」

「お母さん、お母さん あら／＼あんなきれいな」

「あれはねレンゲ草つて云ふの、きれいでせう、人間の子供が大好きでよく取りに来るんですよ」

「僕人間の子供つて早くみたいなあ」

そんな事を云つてゐるさ向ふの土の中から頭の大きな、くろんぼのオタマジャクシがチョロ／＼やつて來ましたので、坊や達はびつくりしてお父さんとお母さんの後の方へかくれてしまひました。

「やあ、メダカのおぢさんおばさん今日は」

「おや、今日は、オタマジヤクシさん」

「おばさん可愛い、赤ちやんですね。僕お友達が出来てうれしいな。ね、君たち僕さこれから遊びませうね」

「オタマジヤクシさんですよ、これから仲よしになつていたよ」

お母さんにさう云はれても、まだ坊や達は少しばかりこはくてお父さんにしつかりつかまつてゐました。

オタマジヤクシさんは急ぎの御用があるからさ云つてさよならして行つてしまひました。

「さあ泳ぎのおけいこだよ、一度お父さんの泳ぐのを見てゐてごらん、ほら、スーッくく、こんな風に身體を動かして」

「僕恐いなあ」

「だめくそんな弱蟲ぢやメダカの兵隊さんにはなれませんかよ」

「メダカのお國にも兵隊さんゐるのよ可愛い、兵隊さんね」

メダカの坊やたちもやつぱり兵隊さんになりたくて、一生懸命泳ぎのおけいこをしてゐました。

「恐いよおーく お母さん」

「どうしたの？　あら、まあカニのおぢさんぢやありませんか、おぢさん今日は」

「やあいゝお天気ですね、　ほおこれは可愛いゝ子供たちおぢさんを見てびつくりしたの？

んんんんん」

「さあ、カニのおぢさんに御挨拶なさい、みんな」

「おぢさん今日は」

「おぢさん今日は」

「おぢさん今日は」

カニのおぢさんは、まるいお目々をぐつこいばして、大きなハサミでメダカの坊や達の頭をなせる様にしながら

「本當にお利巧さんですね、おぢさんの所へもうんゝ遊びにゐらつしやい。おぢさんのお家は  
すべそだから」

「はい、ううまありがたう」

「おぢさん、おぢさんの持つてるものなあにそれ」

「これかいこれはハサミだよ」

「ハサミつて何かはさむの？」

「さうだよ、おいしい御馳走をはさんだり悪いものがやつて来た時このハサミでチョン切つてしまふのだ」

「おぢさん、いゝもの持つてるんだなあ」

「人間のお國の兵隊さんが鐵砲を持つてる様に、このハサミもおぢさんの鐵砲なんだよ」

「ねえお父さん、僕達にさうしてないの?」

「僕もおぢさんみたいのほしいなあ」

メダカの坊や達はうちやましさに云ひましたが、カニのおぢさんは手をふつて、

「いや〜坊や達にこのハサミはいらないよ、みんなはそんないゝ身體を持つてるのだ

からね、それでしつかり泳ぎのけいこさへすれば、こんなものはかへつて邪魔つけだよ」

「かうして」

「おぢさんは恐いものが来てもみんなの様にスーッと〜早く泳げないからね」

カニのおぢさんはチョット悲しそうな顔をしてさう云ひました。

メダカの坊や達はおぢさんの話をきいて、もうハサミをほしいとは思ひませんでした。

お日様が、丁度、たんぼの真上でこの小さな流れの中のメダカ達をのぞき込んでゐらつしや

る頃は、メダカの坊や達は随分泳ぐのが上手になつて、お父さんお母さんミオニゴッコをはじ

めてみました。

「ジャンケンポン」

「ジャンケンポン」

「あら、お母さんのオニだよ」

「そらにげよう」

メダカの坊や達はこつても早くつて、チヨロチヨロくくくにげまはるので、メダカのお母さんは、何時までたつてもつかまへられなくて困つてしまひました。でも子供達の泳ぐのが随分上手になつたので、本當はうれしかつたのです。

あら！坊や達は何時の間にかみえなくなつてしまひました、きつこ近くの草のかげにでもかくれてお母さんをおごろかさうこしてゐるのでせう。

お母さんメダカは、「ほつ」こ一息ついてから、坊や達をみつつけ様こそうつこ泳ぎ出しました。

丁度其の時

「ボチャーン!!」

こ大きな音を立て、この小川の中にこび込んだものがあります。

「うわー地震だあー」

「お母さん」

「お父さん」

坊や達はオニになつたお母さんをびつくりさせようと思つてゐたのに、今の大きな音でかへつてびつくりして草のかげや石のかげから、かけ出して來ました。

その時ポツカリ水の中からお顔を出したのは………

「なーんだ蛙さんだつたのよ」

「おやくびつくりさせてごめんなさい。あんまり暑いもんだから一泳ぎしやうと思つてび込んだら、坊ちゃん達をびつくりさせてしまつて、ほんこに悪かつたね」

メダカの坊や達があんまりびつくりばかりしてゐるものだから、お父さんもお母さんもおなかをかゝへて笑つてゐます。

「だつて僕、ほんこにおごろいたよ、随分大きくゆれたんだもの」

「僕だつておごろいたよ」

「僕も」

蛙のおぢさんは「暑いく」云ひながら上手に泳いでゆきました。

「蛙のおぢさんつて、なんだか強さうね、お父さん」

「さうだよ、この小川の中では殿様トクサマになるのは蛙さんばかりだからね」

「僕達食べられやしない？」

「うゝん大丈夫だよ、この小川に住んでゐるものはみんな仲よしなんだから、決してそんな心配はいらないよ」

メダカの坊や達はお父さんにさう云はれてほんまに安心しました。

「でもこのお國には随分色んなおぢさん達ゐるんだなあ」

なんだかメダカの坊や達はおつゞく／＼色んな珍らしいものをみたい様な氣がしました。でも又それを見る事は恐い様な氣もしました。

「さあお家へかへつて少し休ませよう」

お母さんメダカがおつしやいました。

「僕おなかとすいちやつた」

「僕も」

「僕も」

メダカさん達あんまりびつくりばかりしておなかとすいちやつたんですつて。

今朝はお父さんとお母さんの後からおつかなびつくりついて來たのに、歸りはもうこんなに



元氣でスーッと走つてしまひました。

あら〜あんなに遠くまで泳いで行つて、

「お父さーん

お母さーん

早くおらつしやいよぎー」

なんて呼んでゐます。

お父さんとお母さんは、仲よく竝んで泳いでゆく三匹の坊や達をみて、「早く立派な兵隊さんにならばいゝなあ」と思ひました。

(をほり)